日本における中国画題綜覧（一）

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (1)

張　小鋼
Zhang　Xiaogang

あ行

ああきみこのわかれいいかんぞ　嗟君此別意何如

唐の高適の「送李少府貶峽中王少府貶長沙」（李少府の峽中に貶せられ、王少府の長沙に貶せられるを送る）の七言律詩を図解する絵である。李少府が峽中へ、王少府が長沙へ左遷される際、二人に贈った詩作である。少府とは県の尉（検察、警察を指揮する官職）の雅名である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

嗟君此別意何如，駐銜杯問謫居。巫峽啼猿數行淚，衡陽歸雁幾封書。青楓江上秋天遠，白帝城邊古木疎。聖代卽今多雨露，暫時分手莫躊躇。（高適「送李少府貶峽中王少府貶長沙」，明・李攀龍編『唐詩選』巻五・七言律詩）

【作例】

「嗟君此別意何如」（高井蘭山先生著、畫狂老人卍翁筆『畫本唐詩選』七編、天保七年［1836］嵩山房刊本）

あいおくりてこうだいにのぞめば　相送臨高臺

唐の王維の「臨高臺送黎拾遺」（臨高臺黎拾遺を送る）という五言絶句を図解する絵である。黎拾遺と離別する際、贈った詩作である。拾遺は皇帝の言行の誤りを指摘したり、諫めたりする官職である。臨高臺は楽府の題名である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

相送臨高臺，川原杳何極。日暮飛鳥還，行人去不息。（王維「臨高臺送黎拾遺」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「相送臨高臺」（石峯先生畫『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］刊本、文化二年［1805］嵩山房再刻本）

あきはとうりをそめてははなかばくれないに　秋染棠梨葉半紅

唐の王周の「宿疎陂驛」（疎陂驛に宿す）という七言絶句を図解する絵である。

【出典】

秋染棠梨葉半紅，荊州東望草平空。誰知孤宦天涯意，微雨蕭蕭古驛

中。（王周「宿疎陂驛」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「秋染棠梨葉半紅」（紅翠齋主人畫『畫本唐詩選』四編・七言絶句續編、寛政五年［1793］嵩山房刊本）

あくせんせんにん　偓佺仙人

偓佺（あくせん）は薬草を採る人である。彼は松の実を食べるのが好きで、体毛が数寸ある。飛ぶように走って馬を追いかけることができるようになった。かつて松の実を堯帝に遣ったが、受け取ってもらえなかった。受け取る人は皆三百歳まで生きていたという。

【出典】

偓佺，採藥父也。好食松子。體毛數寸，能飛行逐走馬。以松子遺堯，堯不受。時受食者，皆三百歳。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻一）

【作例】

「偓佺」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻一、萬暦二八年［1600］玩虎軒刊本）

「偓佺」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』一、天明四年［1784］寂照寺蔵板）

「偓佺仙人」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』五編、明治一二年［1879］寶集堂刊本）

あこくきょう　阿黒驕

阿黒驕は地名のようである。『三才図会』によると、そこには人口も多いし、樹木も多い。ただし、羊や馬がいない。人々は狩猟や漁業を以て生計を立てる。阿黒驕から応天府（江蘇省南京）に行く場合、七か月がかかるという。

【出典】

阿黒驕多人煙，盡係林木，無羊馬，射生打魚爲活。至應天府行七箇月。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十四巻）

【作例】

「阿黒驕」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「阿黒驕」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正徳三年［1713］序、杏林堂蔵板）

「阿黒驕」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

あごにこうはをはりつけてきずあとをおおえ　腮貼香葩蓋疵痕

呉の孫和（そんわ）（223～252）は字が子孝（しこう）といい、三国時代の呉の孫権（そんけん）の三男である。赤烏五年（242）皇太子になったが、後に讒言を受け廃され、自殺に追い込まれた。伝えることによると、孫和は鄧（とう）夫人が好きで、時々夫人を膝の上にのせる。ある晩、孫は月下で水晶如意を持って踊り、誤って夫人の頬を怪我させた。夫人が大変苦しいので、孫が自らその傷口を舐めて、太医に薬を調合するよう命じた。太医が「白獺の骨髄に玉と琥珀の屑を混ぜて貼り付けると、その傷跡を消せる」と言った。すると、孫が大金を出して探させた。ついに富春という地方で獺の骨が見つかった。孫がさっそく膏薬を作らせた。ところが、琥珀が多すぎたので、塗りつけると赤い点がある。近づいてよく見ると、夫人の美しさをさらに増したのである。他の夫人たちがそれを見て、皆孫に寵愛されるために、丹脂で頬につけるようになった。故に風習になったという。

【出典】
孫和字子孝，慮弟也。少以母王有寵見愛，年十四，爲置宮衛，使中書令闞澤教以書藝。好學下士，甚見稱述。赤烏五年，立爲太子，時年十九。（晉・陳壽撰『三國志』吳書卷五十九，吳主五子傳第十四）
孫和悅鄧夫人，嘗置膝上，和於月下舞水晶如意，誤傷夫人頰，血流污袴，嬌姹彌苦，自舐其瘡，命太醫合藥。醫曰，得白獺髓雜玉與琥珀屑，當滅此痕。卽購，致百金能得白獺髓者，厚賞之。有富春漁人云，此物知人欲，取則逃入石穴，伺其祭魚之時，獺有鬬死者，穴中應有枯骨，雖無髓，其骨可合玉，舂爲粉，歛於瘡上，其痕則滅。和乃命合此膏。琥珀太多，卽差而有赤點如朱，逼而視之，更益其妍，諸嬖人欲要寵，皆以丹脂點頰而後幸，妖惑相動，遂成淫俗。（晉・王嘉『拾遺記』巻八）

【作例】
「鄧夫人」（清・王翽繪『百美新詠』圖傳十二、嘉慶九年［1804］序、顔氏刻本）
「腮貼香葩蓋疵痕」（法橋玉山畫『畫本玉藻譚』巻二、文化二年［1805］羣玉堂・河内屋梓）

あさい　阿柴

阿柴とは歴史において西域の異民族に対する蔑称で、すなわち「雑種」という意味である。

【出典】
西北雜種謂之爲阿柴虜，或號爲野虜焉。（唐・房玄齡等撰『晉書』巻九十七，列傳第六十七）

【作例】
「阿柴」（橘有税『繪本故事談』巻六、正德四年［1714］稱觥堂刊本）

あさつぶ　阿薩部

阿薩部は部族の名前のようである。『三才図会』によると、この部族は狩猟で生活を立てている。また独特な酒を作る。その方法は獲物の肉を石で肉汁を圧搾し、さらに波斯（ペルシャ）や拂林（一般的に東ローマとされるが、ヨーロッパ地域全体とする説もある）などの国の米や草の種を入れ、数日後酒が出来上がるという。

【出典】
阿薩部多獵蟲鹿，剖其肉重疊之，以石壓瀝汁，稅波斯，拂林等國米及草子釀於肉汁之中，經數日，變成酒，飲之可醉。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十四巻）

【作例】
「阿薩部」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻、萬曆三七年［1609］刊本）
「阿薩部」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正德三年［1713］序、杏林堂蔵板）
「阿薩部」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

あし　阿思

阿思は地名のようである。『三才図会』によると、そこには城があり、石によって作られている。応天府（江蘇省南京）までは馬で一年七か月がかかるという。

【出典】
阿思有城池，用石壘就。至應天府馬行一年七個月。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】
「阿思」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「阿思」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正徳三年［1713］序、杏林堂蔵板）
「阿思」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］寶文堂刊本）

あしたにきくゆうしのりかをうたうを　朝聞遊子唱離歌

唐の李頎の「送魏万之京」（魏万の京に之くを送る）という七言律詩を図解する絵である。

【出典】
朝聞遊子唱離歌，昨夜微霜初度河。鴻雁不堪愁裏聽，雲山況是客中過。關城樹色催寒近，御苑砧聲向晚多。莫見長安行樂處，空令歲月易蹉跎。（李頎「送魏万之京」，明・李攀龍編『唐詩選』巻五・七言律詩）

【作例】
「朝聞遊子唱離歌」（高井蘭山先生著、畫狂老人卍翁筆『畫本唐詩選』七編、天保七年［1836］嵩山房刊本）

あしたにじすはくていさいうんのかん　朝辞白帝彩雲間

唐の李白の「早発白帝城」（早に白帝城を発す）という七言絶句を図解する絵である。李白が白帝城（四川省）から江陵（湖北省）まで長江を下ることを書いた詩作である。

【出典】
朝辭白帝彩雲間，千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住，輕舟已過萬重山。（李白「早發白帝城」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】
「朝辞白帝彩雲間」（芙蓉先生畫『畫本唐詩選』續編、寛政二年［1790］嵩山房刊本、文化一一年［1814］再板）

あしたにはすすむとうもんのえい　朝進東門営

唐の杜甫の『後出塞』という五言古詩を図解する絵である。若者が辺境に従軍することを描いた詩作である。「出塞」とは楽府の題名である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】
朝進東門營，暮上河陽橋。落日照大旗，馬鳴風蕭蕭。平沙列萬幕，部伍各見招。中天懸明月，令嚴夜寂寥。悲笳數聲動，壯士慘不驕。借問大將誰，恐是霍嫖姚。（杜甫「後出塞」，明・李攀龍編『唐詩選』巻一・五言古詩）

【作例】
「朝進東門営」（高井蘭山著、翠渓先生畫『畫本唐詩選』五編、天保三年［1832］嵩山房刊本）

あしだるま　葦達磨

蘆に達磨の絵である。

↓「達磨」

【作例】
「葦達磨」（鍬形蕙斎『人物略畫式』、文化一〇年［1813］春風堂刻本）

あしにがん　蘆に雁

蘆に雁の絵である。

↓「鴈」

【作例】

「蘆雁圖軸」（清・邊壽民作、上海博物館所蔵）

「蘆に雁」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』、明和三年［1766］層山堂刻本）

「雁に蘆」（橘雲峨畫『萬象畫式』、明治二七年［1894］錦榮堂刊本）

「蘆に雁」（『初心畫鑑』、明和三年［1766］和泉屋・西村屋再版）

あそびこ　遊児

遊んでいる子供の絵である。

【作例】

「遊児」［徐天池詩］（老蓮先生著『畫圖酔芙蓉』中巻、文化六年［1809］青藜閣刻本）

「遊児」［元畫］（老蓮先生著『畫圖酔芙蓉』下巻、文化六年［1809］青藜閣刻本）

あぼうきゅう　阿房宮

阿房宮は、秦の始皇帝三十五年（前212）に建造した宮殿である。始皇帝が先帝の宮殿が狭いと思い、渭南の上林苑の中に朝宮を作ることにした。先に前殿を作った。東西五百歩、南北五十丈あり、上には一万人が座れる。前殿は阿房という山にあるため、「阿房宮」と呼ばれるようになった。後に項羽の軍によって焼き払われた。その聳えた建築群の雄姿は、杜牧之の『阿房宮賦』から想像される。

【出典】

三十五年，除道，道九原抵雲陽，塹山堙谷直通之。於是始皇以爲咸陽人多，先王之宮廷小。吾聞周文王都豐，武王都鎬，豐鎬之閒，帝王之都也。乃營作朝宮渭南上林苑中。先作前殿阿房。東西五百步，南北五十丈，上可以坐萬人，下可以建五丈旗。周馳爲閣道，自殿下直抵南山。表南山之顛以爲闕。爲復道，自阿房渡渭，屬之咸陽。以象天極閣道，絶漢抵營室也。阿房宮未成。成，欲更擇令名名之。作宮阿房，故天下謂之阿房宮。（漢・司馬遷撰『史記』巻六，秦始皇本紀第六）

六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。覆壓三百餘里。隔離天日。驪山北構而西折。直走咸陽。二川溶溶。流入宮牆。五步一樓。十步一閣。廊腰縵迴。簷牙高啄。各抱地勢。勾心鬥角。盤盤焉。囷囷焉。蜂房水渦矗。不知其几千萬落。長橋臥波。未雲何龍。復道行空。不霽何虹。高低冥迷。不知西東。歌臺暖響。春光融融。舞殿冷袖。風雨淒淒。一日之内。一宮之間。而氣候不齊。妃嬪媵嬙。王子皇孫。辭樓下殿。輦來于秦。朝歌夜絃。爲秦宮人。明星熒熒。開粧鏡也。綠雲擾擾。梳曉鬢也。渭流漲膩。棄脂水也。煙斜霧横。焚椒蘭也。雷霆乍驚。宮車過也。轆轆遠聽。杳不知其所之也。一肌一容。盡態極妍。縵立遠視。而望幸焉。有不得見者三十六年。燕趙之收藏。韓魏之經營。齊楚之精英。幾世幾年。剽略其人。倚疊如山。一旦有不能有。輸來其間。鼎鐺玉石。金塊珠礫。棄擲邐迤，秦人視之。亦甚不惜。嗟乎。一人之心。萬人之心也。秦愛紛奢。人亦念其家。奈何取之盡錙銖。用之如泥沙。使負棟之柱。多於南畝之農夫。架梁之椽。多於機上之宮女。釘頭磷磷。多於在庾之粟粒。瓦縫參差。多於周身之帛縷。直欄横檻。多於九土之城。管弦嘔啞。多於市人之言語。使天下之人。不敢言而敢怒。獨夫之心。日益驕固。戍卒叫。函谷舉。楚人一炬。可憐焦土。嗚呼。滅六國者六國也。非秦也。族秦者秦也。非天下也。嗟夫。使六國各愛其人。則足以拒秦。秦復愛六國之人。則遞三世可至萬世而為君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀而後人哀之。後人哀之而不鑑之。亦使後人而復哀後人也。（唐・杜牧之「阿房宮賦」，『全唐文』巻七四八）

【作例】
「阿房宮」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）
「無題」［阿房宮の大火］（中澤道二翁閲『畫本實語教』巻一、享和一年［1801］序、三書房刊本）

あぼうきゅうちゅうそうげんかれいてんかのきかん、いちじつのうちいっきゅうのあいだきこうひとしからず、さんぜんのびじんよそおいをこらしてくんおうをむかへんとするず　阿房宮中莊嚴花麗天下乃奇觀、一日の内一宮の間氣候齊しからず、三千の美人粧をこらえして君王を迎へんとする圖

唐の杜牧之の「阿房宮賦」を図解する挿絵である。全部で四枚あり、これは「其三」である。

【出典】
一日之內，一宮之間，而氣候不齊。妃嬪媵嬙，王子皇孫，辭樓下殿，輦來於秦。朝歌夜絃，爲秦宮人。明星熒熒，開妝鏡也。綠雲擾擾，梳曉鬟也。渭流漲膩，棄脂水也。煙斜霧橫，焚椒蘭也。雷霆乍驚，宮車過也。轆轆遠聽，杳不知其所之也。一肌一容，盡態極妍。縵立遠視，而望幸焉。（唐・杜牧之「阿房宮賦」，『古文眞寶後集』巻一）

【作例】
「阿房宮中莊嚴花麗天下の奇觀、一日の内一宮の間氣候齊しからず、三千の美人粧をこらして君王を迎へんとする圖」［其三］（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻二、嘉永三年［1850］玉山堂・學而堂刊本）
↓「秦の始皇、六國を平呑し感陽宮に諸侯乃朝賀を受る圖」［其一］、「秦帝驕奢に長じ阿房宮を建て歡樂乃圖」［其二］、「歡極て哀み生ず、盛衰時有り、楚人の一炬、阿房焦土となる圖」［其四］

あみうちのず　注網圖

注網は漁網の一種で、口が小さく、中が大きいという形の網である。従って沢山の魚を捕獲することができる。

【出典】
易庖犧氏結繩爲網罟，此制之所始，制各不同，隨所宜而用之。惟注網則施於急流中。其制纖口而巨腹，所得魚極不貲。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』器用五巻）

【作例】
「注網」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』器用五巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「注網圖」（信天翁月岡法橋雪鼎『和漢名筆金玉畫府』巻六・補遺、纂、明和八年［1771］寶文堂刻本）

あめのしょうき　雨の鍾馗

↓「鍾馗」

【作例】
「雨の鍾馗」（鈴鄰奈筆『戲画抜粋一蝶畫譜』巻上、明和七年［1770］青山堂蔵板）

あめはやむようりんとうとのほとり　雨歇楊林東渡頭

唐の常建（じょうけん）の「三日尋李九莊」（三日（みっか）、李九（りきゅう）の莊（そう）を尋（たず）ぬ）という七言絶句を図解する絵である。

【出典】
雨歇楊林東渡頭，永和三日蕩輕舟。故人家在桃花岸，直到門前溪水流。（常建「三日尋李九莊」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶

句）

【作例】

「雨歇楊林東渡頭」（明・黄鳳池編『唐詩畫譜』、萬暦年間［1573～1620］集雅齋刊本）

「雨歇楊林東渡頭」（芙蓉先生畫『畫本唐詩選』續編、寛政二年［1790］嵩山房刊本、文化一一年［1814］再板）

あやしむしょうかくとざして　怪来粧閣閉

唐の王維の「班婕妤」という五言絶句を図解する絵である。

→班婕妤、班女

【出典】

怪來妝閣閉，朝下不相迎。總向春園裏，花間笑語聲。（王維「班婕妤」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「怪来粧閣閉」（石峯先生畫『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］嵩山房刊本、文化二年［1805］再刻本）

あらたにたいゆうをくわえられてじゅはなおこうなり　新加大邑綬仍黄

唐の李頎の「寄綦毋三」（綦毋三に寄す）という七言律詩を図解する絵である。綦毋三（名は潛、字は季通、一説は孝通）が宜寿（陝西省周至）の尉（検察・警察を指揮する官職）から集賢院待制（宮中の学問所の係）へ昇進した際、作者が贈った詩作である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

新加大邑綬仍黄，近與單車向洛陽。顧眄一過丞相府，風流三接令公香。南川粳稻花侵縣，西嶺雲霞色滿堂。共道進賢蒙上賞，看君幾歲作臺郎。（李頎「寄綦毋三」，明・李攀龍編『唐詩選』巻五・七言律詩）

【作例】

「新加大邑綬仍黄」（高井蘭山先生著、畫狂老人卍翁筆『畫本唐詩選』七編、天保七年［1836］嵩山房刊本）

ありしゃろ　阿里車盧

阿里車盧は皆山林に住んでいるが、城がある。農業によって生計を立てている。そこから応天府（江蘇省南京）まで馬で行くと、一年間がかかる。

【出典】

阿里車盧並住山林，有城池，種田而食。至應天府馬行一年。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】

「阿里車盧」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「阿里車盧」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正徳三年［1713］序、杏林堂蔵板）

「阿里車盧」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］寶文堂刊本）

あろさんどう　阿盧三洞

阿盧三洞は雲南省盧西県の阿盧山にある。三洞の名称は、昔はよく分らないが、今は瀘源洞、玉柱洞、碧玉洞という。

【出典】

阿盧山。在府城西三里延亘四十餘里。南接彌勒州，北跨師宗州。舊有阿盧部。（明・李賢等撰『大明一統志』巻八十七・廣西府）

【作例】
「阿盧三洞」（『名山圖』、崇禎六年［1633］墨繪斎刊本）
「阿盧三洞」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻四、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］白雲館刊本）

あんえい　晏嬰

晏嬰（?～前500）は晏平仲のことであり、莱の夷維（山東省高密）の人である。彼は宰相として斉の霊公、荘公、景公に仕えていた。『晏子春秋』（戦国時代の人が編集した晏嬰の語録）が伝えられている。

【出典】
晏平仲　嬰者，莱之夷維人也。事齊靈公、莊公、景公，以節儉力行重於齊。既相齊，食不重肉，妾不衣帛。其在朝，君語及之，卽危言。語不及之，卽危行。國有道卽順命。無道卽衡命。以此三世顯名於諸侯。［中略］晏子爲齊相，出，其御之妻，從門閒而闚其夫。其夫爲相御，擁大蓋，策駟馬，意氣揚揚，甚自得也。既而歸，其妻請去。夫問其故。妻曰，晏子長不滿六尺，身相齊國，名顯諸侯。今者妾觀其出，志念深矣，常有以自下者。今子長八尺，乃爲人僕御，然子之意自以爲足，妾是以求去也。其後夫自抑損。晏子怪而問之，御以實對。晏子薦以爲大夫。（漢・司馬遷撰『史記』巻六十二，管晏列傳第二）

【作例】
「晏子之御者の妻哭才にして夫を諫める圖」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻六、享保五年［1720］稱觥堂板、明和七年［1770］須原屋・柏原屋再板）
「晏嬰」［御妻窺夫］（中澤道二翁閲『畫本實語教』巻一、享和一年［1801］序、三書房刻本）

あんえいだつしょく　晏嬰脱粟

晏嬰は斉国の名宰相である。彼は常に玄米を食し、味に拘らないとのことである。

【出典】
韓子春秋曰，晏嬰字平仲，爲齊相。常食脫粟米，不重味。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】
「晏嬰脱粟」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻五、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

あんきせい　安期生

安期生は仙人で、瑯邪阜郷の生まれである。戦国秦漢の間を生きていた。かつて彼が河上丈人に師事して黄老の学を学び、東海の辺りで薬を売っていた。時の人々に「千歳翁」と呼ばれていた。秦の始皇帝が東へ巡行した際に、彼に会い、三日間にわたり話し合い、数千万の金や璧の玉を賜った。阜郷亭を出る際に、皆置いて行った。手紙一通と赤玉舄一両だけを礼として残した。手紙には「千年後、私を蓬莱山まで訪ねてきてください」と書いてある。始皇帝は早速使者徐市や盧生など数百人を派遣して海に行ったが、いずれも蓬莱山まで行けず、風に吹き戻された。阜郷亭に祠を建てている。そのような祠は海辺に十数ヵ所があるという。

【出典】
安期先生者，瑯邪阜鄉人也。賣藥於東海邊，時人皆言千歲翁。秦始皇東遊請見，與語三日三夜，賜金璧度數千萬。出於阜鄉亭皆置去，留書以赤玉舄一量爲報曰，後數年，求我於蓬萊山。始皇既遣使者徐市　盧生等數百人入海，未至蓬萊山，輒逢風波而還。立祠阜鄉亭海

邊十數處云。（漢・劉向撰『列仙傳』巻上）
太史公曰，始齊之蒯通，及主父偃，讀樂毅之報燕王書，未嘗不廢書而泣也。樂臣公學黄帝，老子。其本師號曰河上丈人。不知其所出。河上丈人教安期生，安期生教毛翕公，毛翕公教樂瑕公，樂瑕公教樂臣公，樂臣公教蓋公，蓋公教於齊高密膠西，爲曹相國師。（漢・司馬遷撰『史記』巻八十，樂毅列傳第二十）

【作例】
「安期生」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻二、萬暦二八年［1600］玩虎軒刊本）
「安期生」（明・洪應明撰『仙佛奇踪』巻一、萬暦三〇年［1602］太和館刻本）
「安期生」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「安期生」（『任渭長畫傳四種』高士傳、中国古畫譜集成第四巻、山東美術出版社、2000年）
「安期生」（林守篤編述『畫筌』巻四、正德二年［1712］序、享保六年［1721］保壽堂・養心堂刻本）
「安期生」（寂照主人月僊『列仙圖賛』二、天明四年［1784］寂照寺蔵板）
「安期生」（鍬形蕙斎『人物略畫式』、文化一〇年［1813］春風堂刻本）

あんぎょようよう　晏御揚揚

斉国の宰相である晏嬰（平仲）の御者が晏嬰のために馬車を意気揚々に走らせて、大変満足している様子である。御者の妻が夫の得意げな様子を見て、離婚するよう迫った。それ以来、御者は慎重に行動するようになった。晏嬰は不思議に思い、尋ねると、御者は妻の話を話した。すると、晏嬰が彼を推薦して大夫になった。

【出典】
史記，晏平仲嬰，爲齊相出。其御之妻從門閒而窺其夫。其夫爲相御，擁大蓋，策駟馬，意氣揚揚，甚自得也。既而歸，其妻請去。夫問其故。妻曰，晏子長不滿六尺。身相齊國，名顯諸侯。妾觀其出，志念深矣。常有以自下者。今子長八尺，乃爲人僕御。然子之意，自以爲足。妾是以求去也。其後夫自抑損。晏子怪問之。御以實對。晏子薦以爲大夫。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】
「晏御揚揚」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）
→「晏嬰」

あんせいとごのこせいそう　安西都護胡青驄

唐の詩人杜甫（とほ）の「高都護驄馬行（こうとごそうばこう）」という七言古詩を図解する絵である。高都護とは唐代の名将である高仙芝のことである。都護とは官職である。作者は高仙芝が安西（新疆ウィグル自治区）に赴任する際、贈った詩作である。「驄馬行」は楽府の題名である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】
安西都護胡青驄，聲價欻然來向東。此馬臨陣久無敵，與人一心成大功。功成惠養隨所致，飄飄遠自流沙至。雄姿未受伏櫪恩，猛氣猶思戰場利。踠促蹄高如踣鐵，交河幾蹴層冰裂。五花散作雲滿身，萬暦方看汗流血。長安壯兒不敢騎，走過掣電傾城知。青絲絡頭爲君老，何由卻出横門道。（杜甫「高都護驄馬行」，明・李攀龍編『唐詩選』巻二・七言古詩）

【作例】
「安西都護胡青驄」（高井蘭山著、翠渓先生畫『畫本唐詩選』五編、

天保三年［1832］嵩山房刊本）

あんだばんこく　晏陀蠻國

晏陀蠻国は不詳である。『三才図会』によるとは周囲七千里あり、人々は体が黒漆のようである。彼らが山蠻と呼ばれ、食人の風習があるという。

【出典】

晏陀蠻國自蘭無里國順風而去，其國周圍七千里，人身如黑漆，號山蠻。能食生人，船人不敢近岸。地無鐵，惟磨蚌殼爲刃。其國有一聖跡，用渾金作床，承一死人，經代不朽。常有巨蛇衛護，其蛇毛長二尺，人不敢近。有一井，一年兩次水溢流入海，所過沙石經浸盡成金。（明・王斫，王思義撰『三才圖會』人物十二巻）

【作例】

「晏陀蠻國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「晏陀蠻國」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正徳三年［1713］序、杏林堂蔵板）

「晏陀蠻國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

あんへいちゅう、そにつかいしてせいをはずかしめざるず
晏平仲、楚に使して齊を辱しめざる圖

晏子が使節として楚国に行った。楚の人が晏子の身長が低いため、わざと正門のそばの小さい門に入らせるように誘導した。しかし、晏子がそれを断わり、「犬の国に行くならば、犬の門に入るが、いま楚という国に来たので、この犬の門に入るべきではない」と言った。そこで、楚の人が改めて正門に入るように誘導した。晏子が正門から入り、楚王に謁見した。楚王が「齊国に人がいないか」と尋ねた。晏子が「臨淄［齊の都］に三百の村があり、袂を上げると、陰となる。汗を振ると、雨となる。人が込み合うほどいるのに、なぜ人がいないというのか」と答えた。王は「しかしなぜ君を使者として派遣するのか」と言った。晏子が「齊王は使者を任命するのがそれぞれの目的がある。賢者を使者として賢明な王様のところへ派遣する。不肖の者を使者として不肖の王さまのところへ派遣する。僕は一番不肖なので、直接に楚に来たわけだ」と答えた。

【出典】

晏子使楚，以晏子短，楚人爲小門于大門之側，而延晏子。晏子不入曰，使狗國者從狗門入，今臣使楚，不當從此門入。儐者更道從大門入，見楚王，王曰，齊無人耶。晏子對曰，臨淄三百閭，張袂成陰，揮汗成雨，比肩繼踵而在，何爲無人。王曰，然則子何爲使乎。晏子對曰，齊命使各有所主，其賢者使使賢賢王，不肖者使使不肖王，晏最不肖，故直使楚矣。（『晏子春秋』巻六）

【作例】

「晏平仲楚に使して齊を辱しめざる圖」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻六、享保五年［1720］稱觥堂板、明和七年［1770］須原屋・柏原屋再板）

あんま　鞍馬

人が馬に乗っている絵である。

【作例】

「鞍馬」［陳憲章筆］（法眼春卜一翁集『畫史會要』巻二、寛延四年［1751］須原茂兵衛等刊本）

いいん　伊尹　　い行

伊尹の名は「阿衡」といい、殷王朝の名臣である。阿衡は出世する前に、湯王に遊説したいと思うが、なかなかきっかけがない。そこで、湯の妃有莘氏の家来になった。彼は湯のために料理を作ったうえ、さらに料理の味を説明することによって、湯に自分の政見を主張した。湯は伊尹のことを高く評価し、人を派遣して迎えに行ったが、断られた。五回目でやっとついてきた。湯は伊尹に国政を任せたが、しばらくして伊尹は湯を離れて夏に仕えた。だが、夏の桀は淫乱のうえ、暴虐であり、国政が荒れていた。そのため、伊尹はまた湯のところに戻った。伊尹は『女鳩女房』を書き、湯の賢臣である女鳩と女房を賛美すると同時に、夏の桀を風刺した。後に伊尹が湯を補佐して、夏の王朝を倒し、殷の王朝を作った。湯が崩御した後、伊尹は前後太子太丁、太丁の弟外丙帝、外丙の弟中壬帝、太丁の子である太甲帝（後に「太宗」と称す）、及び太宗の子である沃丁帝を補佐した。沃丁帝が在位中、伊尹は亡くなった。彼は亳（安徽省亳州）に埋葬された。

【出典】

伊尹名阿衡。阿衡欲奸湯而無由。乃爲有莘氏媵臣，負鼎俎，以滋味說湯，致于王道。或曰，伊尹處士。湯使人聘迎之。五反然後肯往從湯。言素王及九主之事。湯舉，任以國政。伊尹去湯適夏。既醜有夏，復歸於亳。入自北門，遇女鳩女房。作女鳩女房。［中略］當是時，夏桀爲虐政淫荒，而諸侯昆吾氏爲亂。湯乃興師率諸侯。伊尹從湯。湯自把鉞以伐昆吾，遂伐桀。［中略］湯既勝夏，欲遷其社，不可，作夏社。伊尹報。於是諸侯畢服，湯乃踐天子位，平定海内。［中略］伊尹作咸有一德。咎單作明居。湯乃改正朔，易服色，上白，朝會以晝。湯崩，太子太丁未立而卒。於是迺立太丁之弟外丙。是爲帝外丙。帝外丙卽位三年崩。立外丙之弟中壬。是爲帝中壬。帝中壬卽位四年崩。伊尹迺立太丁之子太甲。太甲，成湯適長孫也。是爲帝太甲。帝太甲元年，伊尹作伊訓，作肆命，作徂后。帝太甲既立三年，不明暴虐，不遵湯法，亂德。於是伊尹放之於桐宮，三年。伊尹攝行政當國，以朝諸侯。帝太甲居桐宮三年，悔過自責反善。於是伊尹迺迎帝太甲，而授之政。帝太甲修德。諸侯咸歸殷，百姓以寧。伊尹嘉之，迺作太甲訓三篇。褒帝太甲稱太宗。太宗崩，子沃丁立。帝沃丁之時，伊尹卒。既葬伊尹於亳。（漢・司馬遷撰『史記』巻三，殷本紀第三）

【作例】

「伊尹」（明・天然撰『歴代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）
「伊尹」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物四巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「伊尹」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』巻一、道光一〇年［1830］刊本）
「商書伊訓圖」（元・王惲圖、清・徐鄺、李文田補圖『欽定元王惲承華事略補圖』巻一、光緒二二年［1896］刊本）
「伊尹」（橘有税『繪本故事談』巻六、正徳四年［1714］稱觥堂刊本）
「伊尹之像」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻四、享保五年［1720］稱觥堂板、明和七年［1770］須原屋・柏原屋再板）
「伊尹」（橘宗兵衛［有税］繪『繪本通寶志』巻五上、享保一四年［1729］稱觥堂板）
「伊尹」（文鳳駭聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

いいんふてい　伊尹負鼎

→「伊尹」

【出典】

史記，伊尹欲干湯而無由。乃爲有莘氏媵臣，負鼎俎，以滋味説湯，致於王道。或曰，伊尹處士。湯使人聘迎之。五反然後肯往從湯，言素王及九主之事。湯舉任以國政。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「伊尹負鼎」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

いうなかれしゅうこうりべつかたしと　莫道秋江離別難

唐の王昌齢（おうしょうれい）の「重別李評事」（重ねて李評事に別（わか）る）の七言絶句を図解する絵である。評事は大理寺に属する刑事裁判及び刑罰を担当する官職である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

莫道秋江離別難，舟船明日是長安。吳姬緩舞留君醉，隨意青楓白露寒。（王昌齢「重別李評事」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「莫道秋江離別難」（芙蓉先生畫『畫本唐詩選』續編、寛政二年［1790］嵩山房刊本、文化一一年［1814］再板）

いおうぶつ　韋應物

韋應物（737～?）は、長安（陝西省西安）の生まれで、周の逍遥公の末裔である。その詩からみると、天宝（742～756）の頃、玄宗帝に仕え遊幸したことがあるため、三衛郎（近衛兵）をつとめたことがあると推測される。安禄山の乱の後、一時職を失った。建中二年（781）、比部外郎より滁州刺史に転出し、後に江州刺史に転任した。貞元（785～804）の初め頃、蘇州の刺史に転任した。辞めた後もそのまま蘇州に住み着いた。したがって彼はよく「韋蘇州」と呼ばれる。韋應物は高潔な人で、よく香を焚き床を拭いて座る。ごく限られた友人としか付き合わない。その中には顧況、劉長卿、丹丘、秦系、皎然とよく往来した。王維、孟浩然、柳宗元とあわせて「王孟韋柳」と呼ばれる。また、陶淵明と並べて「陶韋」とも呼ばれる。著書には『韋蘇州集』がある。

【出典】

周逍遙公夐之後，待價生令儀，令儀生鑾，鑾生應物。其詩言天寶時扈從遊幸事，疑爲三衛。永泰中任洛陽丞，京兆府功曹。大曆十四年，自扈縣令制除櫟陽令。以疾辭不就。建中二年，由比部外郎出刺滁州，改刺江州。追赴闕，改左司郎中。正元初，歷蘇州。罷守，寓蘇臺永定精舍。（宋・計敏夫撰『唐詩紀事』巻二十六）

應物，京兆人也。尚俠，初以三衛郎事玄宗，及崩，始悔，折節讀書。爲性高潔，鮮食寡欲，所居必焚香掃地而坐，冥心象外。天寶時，扈從遊幸。永泰中，任洛陽丞。還京兆府功曹。大曆十四年，自鄠縣令制除櫟陽令，以疾辭歸，寓善福寺精舍。建中二年，由前資除比部員外郎。出爲滁州刺史。居頃之，改江州刺史。追赴闕，改左司郎中。或媢其進，媒孽之，貞元初，又出爲蘇州刺史。大和中，以太僕少卿兼御史中丞，爲諸道鹽鐵轉運，江淮留後。罷居永定，齋心屏除人事。［中略］有集十巻，今傳於世。（元・辛文房撰『唐才子傳』巻四）

【作例】

「韋蘇州像」（清・顧沅輯、孔継堯繪『呉郡名賢圖傳讃』、道光七年［1827］序、清・張錦章刻本）

「韋應物」（狩野探幽繪『詩仙堂志』詩仙圖録、萬治二年［1659］刊本）

「韋應物」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

いきやくすさんごのむち　遺却珊瑚鞭

唐の崔國輔の「長楽少年行」という五言絶句を図解する絵である。「長楽」とは漢の長楽宮のことで、「少年行」は楽府の題名である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

遺卻珊瑚鞭，白馬驕不行。章臺折楊柳，春日路傍情。（崔國輔「長樂少年行」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「遺却珊瑚鞭」（石峯先生畫『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］嵩山房刊本、文化二年［1805］再刻本）

いくおうざん　育王山

育王山は阿育王山のことである。阿育王山は浙江省寧波の東にあり、もとは鄮山という。伝えるところによると、東晋（317～420）の頃、僧侶慧達（本名は劉薩訶）が山頂に仏塔の礎が見つかり、それが阿育王の造った八万四千個の塔の一つを信じ、寺を建てた。そのため、鄮山が阿育王山と呼ばれるようになった。

【出典】

阿育王山在浙江寧波府，去府治四十里。山有阿育王寺舍利塔，相傳爲地中湧出，因以名寺，遂因以名山。（『四庫全書總目』巻七十六，明・郭子章撰『阿育王山志』十巻）

阿育王山在府城東五十里，舊名鄮山。晉太康中，并州人劉薩訶得阿育王塔於此，因名。（明・李賢等撰『大明一統志』巻四十六）

【作例】

「育王山」（吉村周山編『和漢名筆畫寶』巻四、明和八年［1771］弘文堂刊本）

いくにんかともにいるしゃせんじょう　幾人同入謝宣城

唐の李端の「送劉侍郎」（劉侍郎を送る）という七言絶句を図解する絵である。侍郎は尚書省内の六つの部の次官である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

幾人同入謝宣城，未及酬恩隔死生。唯有夜猿知客恨，嶧陽溪路第三聲。（李端「送劉侍郎」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「幾人同入謝宣城」（紅翠齋主人畫『畫本唐詩選』四編・七言絶句續編、寛政五年［1793］嵩山房刊本）

いけんまんえい　韋賢満籯

前漢の韋賢（前148～前60）は、字は長孺といい、魯国の鄒（山東省鄒）の人である。彼は『禮』や『尚書』に精通し、さらに『詩』を教授する。漢の宣帝（前74～前49在位）の頃の宰相であったが、年配や病気を理由に引退した。宣帝より黄金を百斤贈られた。故に魯（山東省）の地方に「子に黄金を一杯残すより、一つの経書に与えた方がいい」ということわざが伝えられている。

【出典】

前漢韋賢字長孺，魯國鄒人。爲人質樸少欲。篤志於學，兼通禮尚書，以詩教授。號稱鄒魯大儒。宣帝時爲丞相，以老病乞骸骨。賜黄金百斤，加第一區。丞相致仕自賢始。少子玄成字少翁，好學修父業，尤謙遜下士。復以明經，歷位至丞相。故鄒魯諺曰，遺子黄金滿籯，不如一經。玄成相元帝十年，守正持重不及父。而文采過之。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「韋賢満籯」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻五、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

いごのず　囲碁圖

【作例】

「囲碁圖」（信天翁月岡法橋雪鼎『和漢名筆金玉畫府』巻六・補遺、明和八年［1771］寶文堂刻本）

十三頁の「潙山仰山摘茶問答」

いざんこうざんてきさもんどう　潙山仰山摘茶問答

↓「潙山摘茶」

【作例】

「潙山仰山摘茶問答」（某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年［1689］刊本）

「潙山仰山摘茶問答」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻六、文政一年［1818］平埜屋・貫器堂等梓行）

いざんこべい　潙山擧米

「潙山擧米」は禅宗の公案の一つである。慶諸禅師が潙山禅師の法会で炊事係をした際、ある日、潙山は慶諸に「施主のものですので、こぼさないでください」と言った。慶諸は「こぼしません」と答えた。潙山は地面から一粒を拾い、「君はこぼさないと言ったが、これはどこから来たのですか」と聞いた。慶諸は無言であった。潙山はさらに言った。「この一粒を軽く見ないでください。千万の粒がこの一粒から生まれるのです」と。慶諸が「千万の粒がこの一粒から生まれるならば、この一粒がどこから生まれたのでしょうか」と問いかけた。すると、潙山が大笑いしながら方丈に戻った。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【出典】

潭州 石霜山 慶諸禪師，盧陵 新淦人也。姓陳氏。年十三依洪井西山 紹鑾禪師落髮，二十三嵩嶽受具。就洛下學毘尼之教，雖知聽制，終爲漸宗。迴抵大潙山法會，爲米頭。一日師在米寮內篩米，潙山云，施主物莫抛撒。師曰，不抛撒。潙山於地上拾得一粒云，汝道不抛撒，遮箇什麼處得來。師無對。潙山又云，莫欺遮一粒子，百千粒從這一粒生。師曰，百千粒從遮一粒生，未審這一粒從什麼處生。潙山呵呵笑歸方丈。（宋・釋道原撰『景德傳燈錄』巻十五，道吾智禪師法嗣，『大正新脩大藏經』第五十一巻）

いざんぜんじ　潙山禪師

潙山禪師は潙山霊祐のことである。百丈禪師の法嗣である。潙山禪師はもともと趙という姓で、福州長谿の人である。彼は十五歳の時に地元の建善寺に出家した。二十三歳の時に江西に周遊し、百丈禪師に参し弟子となった。唐の大中七年（853）正月九日に亡くなり、八十三歳であった。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【出典】

潭州 潙山靈祐禪師者福州 長谿人也。姓趙氏。年十五辭親出家。依本郡建善寺 法常律師剃髮。於杭州 龍興寺受戒。究大小乘經律。二十三遊江西參百丈大智禪師。百丈一見許之入室，遂居參學之首。［中略］唐 大中七年正月九日盥漱敷坐怡然而寂，壽八十三。臘六十四。塔於本山。敕諡大圓禪師。塔曰清淨。（宋・釋道原撰『景德傳燈錄』巻九，百丈海禪師法嗣，『大正新脩大藏經』第五十一巻）

いざんだいえんぜんじ　溈山大圓禅師

↓「溈山禅師」

いざんてきさ　溈山摘茶

溈山摘茶は禅宗の公案の一つである。溈山禅師と仰山禅師とのやりとりである。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【出典】

普請摘茶。師謂仰山曰，終日摘茶只聞子聲不見子形。請現本形相見。仰山撼茶樹。師云。子只得其用不得其體。仰山云。未審和尚如何。師良久。仰山云。和尚只得其體不得其用。師云。放子二十棒。（宋・釋道原撰『景德傳燈記』巻九，百丈海禪師法嗣，『大正新脩大藏經』第五十一巻）

【作例】

↓「溈山仰山摘茶問答」

いざんてきびん　溈山踢瓶

↓「霊祐踢瓶」

いしばし　石橋

石橋が趙州（河北省趙県）にある。その石橋は極めて高い。遠くから見ると、月が出ているようであり、または長い虹が山の間を跨っているようである。橋の両側は欄があり、皆獅子の石彫である。龍朔（661～663）の頃、が二匹の獅子が高麗の間諜に盗み取られていた。後に匠に作りなおしてもらったが、もとの姿に戻れなかった。則天武后（周、684～705在位）の大足（701～704）の頃、黙啜が趙国を破り、趙州と定めた。敵が南へ行こうと、石橋に至ったが、馬が跪いて進まない。橋の上に臥せていた青龍が勇み立って勢く吠えた。すると敵が逃げ去ったという。

【出典】

趙州石橋甚工，磨礲密緻如削焉。望之如初日出雲，長虹飲澗。上有勾欄，皆石也，勾欄並有石獅子。龍朔年中，高麗諜者盗二獅子去，後復募匠修之，莫能相類者。至天后大足年。默啜破趙，定州。賊欲南過，至石橋，馬跪地不進，但見一青龍臥橋上，奮迅而怒，賊乃遁去。（唐・張鷟撰『朝野僉載』巻五）

【作例】

「石橋圖」（唐・張萱繪、宋・郭若虚撰『圖畫見聞志』巻五）

「石橋」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻四、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］白雲館刻本）

いすいとうりゅうしさる　渭水東流去

唐の岑参（しんじん）の「見渭水思秦川」（渭水（いすい）を見（み）て秦川（しんせん）を思（おも）う）という五言絶句を図解する絵である。渭水は川の名前である。秦川は西安を含む平野地帯である（前野直彬注解『唐詩選』参照）。

【出典】

渭水東流去，何時到雍州。憑添兩行淚，寄向故園流。（岑参「見渭水思秦川」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「渭水東流去」（石峯先生畫『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］嵩山房刊本、文化二年［1805］再刻本）

いすいはおのずからしんさいをめぐってまがり　渭水自繞秦塞曲

唐の李憕（ちょう）の「奉和聖製従蓬莱向興慶閣道中留春雨中春望之作応制」

（聖製の「蓬莱従り興慶に向う閣道中にて留春、雨中春望」の作に和し奉る　応制）という七言律詩を図解する絵である。

【出典】

渭水自縈秦塞曲，黄山舊繞漢宮斜。鸞輿迴出千門柳，閣道迴看上苑花。雲裏帝城雙鳳闕，雨中春樹萬人家。爲乗陽氣行時令，不是宸遊翫物華。（李愹「奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制」，明・李攀龍編『唐詩選』巻五・七言律詩）

【作例】

「渭水自縈秦塞曲」（高井蘭山先生著、畫狂老人卍翁筆『畫本唐詩選』七編、天保七年［1836］嵩山房刊本）

いすいりえん　渭水離筵

「渭水」は「易水」の間違いである。渭水は陝西省の中部にあり、黄河の支流である。易水は今日河北省の西部にある。「渭水離筵」は燕国の太子丹が荊軻を見送る場面が描かれているので、実際には易水で別れた場面である。

↓「易水惜別」

いずれのところよりしゅうふういたり　何處秋風至

唐の劉禹錫の「秋風引」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

何處秋風至，蕭蕭送雁羣。朝來入庭樹，孤客最先聞。（劉禹錫「秋風引」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「何處秋風至」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］有斐堂・玉樹堂原刻、寛政六年［1794］再刻本）

「何處秋風至」（石峯先生書画『畫本唐詩選』、天明八年［1788］嵩山房原刻、文化二年［1805］再刻本）

いずれのとしかこことう　何年顧虎頭

唐の杜甫の「題玄武禅師屋壁」（玄武禅師の屋壁に題す）という五言律詩を図解する絵である。

【出典】

何年顧虎頭，滿壁畫滄州。赤日石林氣，青天江海流。錫飛常近鶴，杯渡不驚鷗。似得廬山路，眞隨慧遠遊。（杜甫「題玄武禪師屋壁」，明・李攀龍編『唐詩選』巻三・五言律詩）

【作例】

「何年顧虎頭」（高田圓乗畫『畫本唐詩選』三編、寛政三年［1791］嵩山房刊本）

いせきいっぱい　伊籍一拜

伊籍（生卒不詳）は、字は機伯といい、山陽（山東省済寧）の人である。若い頃、彼は同郷の劉表に頼って仕えていたが、劉表が死んだ後、劉備に仕えるようになった。劉備は益州（四川省成都）を支配下にすると、伊籍を孫権のところに遣った。伊籍は孫権に会うと、一通り拝礼をした。孫権は「あなたは無道の君主のために苦労しているか」と嘲笑した。伊籍は「一通り拝礼して苦労とは言えない」と機知に言い返した。

【出典】

蜀志，伊籍字機伯，山陽人。先主以爲左將軍從事中郎。遣使吳。孫權聞其才辯，欲逆折以辭。籍適入拜。權曰，勞事無道之君乎。對曰，一拜一起，未足爲勞。機捷類如此。權甚異之。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「伊籍一拜」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻九、

享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

いせんせんせい　伊川先生

↓「程伊川」

いせんばいりょう　伊川涪陵

程伊川が船で涪陵（重慶市）に行く途中、川の流れの激しいところを通りかかった際、船中の人々は皆大変不安であったが、伊川だけは落ち着いて動かなかった。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【出典】

伊川涪陵之行過灩澦，波濤洶湧，舟中之人皆驚愕失措，獨伊川凝然不動。岸上有樵者厲聲問曰，舍去如斯，達去如斯。欲答之，而舟已行。［震澤語錄］（『二程外書』巻十二）

いせんもんせつ　伊川門雪

遊酢、楊時は伊川先生の弟子である。ある日、二人が先生に伺ったが、先生が案に伏して眠っているので、二人は敢えて入らず、外で待っていた。その時、雪が降っており、一尺余りも積もった。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【出典】

立雪。遊酢，楊時爲伊川先生弟子。一日，侍先生側。先生隱几而臥，二生不敢去。候其寤。則門外雪深尺餘矣。（明・張岱撰『夜航船』巻五）

いちい　一葦

「一葦」という言葉は『詩経』に由来するものである。唐の孔穎達の注釈（正義）によると、「一葦」とは一本の葦ではなく、一束の葦という意味である。いわゆる筏のようで川に浮かべることができるという。

【出典】

誰謂河廣，一葦杭之。杭，渡也。箋云，誰謂河水廣，與一葦加之，則可以渡之。喻狹也。今我之不渡，直自不往耳。非爲其廣。疏箋，一葦至喻狹。正義曰，言一葦者，謂一束也。可以浮之水上而渡，若桴木伐，然非一根葦也。此假有渡者之辭，非喻夫人之嚮宋渡河也。何者，此文公之時，衞已在河南。自衞適宋，不渡河。（『詩經』巻三，鄘・河廣）

↓「達磨」

いちいだるま　一葦達磨

↓「一葦」、「達磨」

【作例】

「一葦達磨」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻六、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

「一葦達磨」（某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年［1689］刊本）

いちがんのかめ　一眼之龜

仏教の話である。一眼の亀は両目がなく、腹に一つの目があるという。

【出典】

於是二子白父母言，善哉父母，願時往詣雲雷音宿王華至佛所親近供養。所以者何，佛難得值。如優曇鉢羅華，又如一眼之龜值浮木孔。而我等宿福深厚生值佛法，是故父母常聽我等令得出家。（「妙法蓮華經・妙莊嚴王本事品」巻七，『大正新脩大藏經』第九巻）

告諸比丘，如大海中有一盲龜，壽無量劫。百年一遇出頭，復有浮木，

正有一孔，漂流海浪，隨風東西。盲龜百年一出，得遇此孔至海東。浮木或至海西，違繞亦爾。雖復差違，或復相得。凡夫漂流五趣之海，還復人身甚難於此。（「經律異相」巻四十八，『大正新脩大藏經』第五十三巻）

【作例】

「一眼之亀」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻四、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

いちがんれんえいをすぎ　一雁過連営

唐の儲光羲（ちょこうぎ）の「関山月（かんざんげつ）」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

一雁過連營，繁霜覆古城。胡笳在何處，半夜起邊聲。（儲光羲「關山月」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「一雁過連営」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］有斐堂・玉樹堂原刻、寛政六年［1794］再刻本）

「一雁過連営」（石峯先生畫『畫本唐詩選』一編、天明三年［1788］嵩山房刊本、文化二年［1805］再刻本）

いちけいとく　尉遲敬徳

尉遲敬徳（585～658）は、名が恭、字が行といい、朔州善陽（山西省朔）の人である。大業（605～617）の末に朝散大夫であった。後に唐に投降した。唐の太宗は右一府統軍に抜擢し、功績があって鄂国公に封ぜられた。貞観元年（627）に尉遲敬徳は右武侯大将軍を拝命し、呉国公に封ぜられた。顕慶三年（658）に亡くなり、七十四歳であった。諡は忠武といい、昭陵に陪葬された。

【出典】

尉遲敬德，朔州 善陽人。大業末，從軍於高陽，討捕羣賊，以武勇稱，累授朝散大夫。劉武周起，以為偏將，與宋金剛南侵，陷晉，澮二州。敬德深入至夏縣，應接呂崇茂，襲破永安王 孝基，執獨孤懷恩，唐儉等。武德三年，太宗討武周於柏壁，武周令敬德與宋金剛來拒王師於介休。金剛戰敗，奔於突厥，敬德收其餘衆，城守介休。太宗遣任城王 道宗，宇文士及往諭之，敬德與尋相舉城來降。太宗大悅，賜以曲宴，引爲右一府統軍，從擊王世充於東都。［中略］貞觀元年，拜右武侯大將軍，賜爵吳國公，與長孫無忌，房玄齡，杜如晦四人並食實封千三百戶。［中略］敬德好訐直，負其功，每見無忌，玄齡，如晦等短長，必面折廷辯，由是與執政不平。三年，出爲襄州都督。八年，累遷同州刺史。嘗侍宴慶善宮，時有班在其上者，敬德怒曰，汝有何功，合坐我上。任城王 道宗次其下，因解喻之。敬德勃然，拳毆道宗目，幾至眇。［中略］敬德末年篤信仙方，飛鍊金石，服食雲母粉，穿築池臺，崇飾羅綺，嘗奏清商樂以自奉養，不與外人交通，凡十六年。顯慶三年，高宗以敬德功，追贈其父爲幽州都督。其年薨，年七十四。高宗爲之舉哀，廢朝三日，令京官五品以上及朝集使赴宅哭，冊贈司徒，并州都督，諡曰忠武，賜東園秘器，陪葬於昭陵。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻六十八，列傳第十八）

【作例】

「尉遲敬德」（明・天然撰『歴代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）

「尉遲敬德像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「尉遲恭」（清・顧沅撰『古聖賢像傳略』、道光一〇年［1830］刊本）

「尉遲敬德」（法眼周山編『和漢名筆畫英』巻一、寛延二年［1749］序、寛延三年［1750］西村源六・渋川清右衛門刊本）

いちげつさんしゅう　一月三舟

三隻の舟が異なる方向から月を見る絵である。去来生滅のない佛の法身を見るに、衆生がその機根によって差別の念をいだくことのたとえである（大修館書店『新版禅学大辞典』参照）。

【出典】

體用無方赴於物欲。其猶澄江一月。三舟共觀。一舟停住二舟南北。南者見月千里隨南。北者見月。千里隨北。停舟之者。見月不移。是爲此月不離中流。而往南北。（唐・澄觀撰『華嚴經隨疏演義鈔』巻十五，『大正新脩大藏經』第三十六巻）

【作例】

「一月三舟」（『點石齋叢書』、光緒一一年［1885］序、上海点石齋書局石印本）

「一月三舟」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年［1809］序、南嶺館蔵本）

いちげつにしゅじんわらうこといくたびぞ　一月主人笑幾回

唐の崔敏童（さいびんどう）の「宴城東荘」（城東（じょうとう）の荘（そう）に宴（えん）す）という七言絶句を図解する絵である。

【出典】

一月主人笑幾回，相逢相值且銜杯。眼看春色如流水，今日殘花昨日開。（崔敏童「宴城東荘」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「一月主人笑幾回」（紅翠齋主人畫『畫本唐詩選』四編・七言絶句續編、寛政五年［1793］嵩山房刊本）

いちじょうせいこさんじょう　一丈青扈三娘

扈三娘は『水滸伝』の豪傑の一人である。綽名は「一丈青」という。彼女は扈家荘の荘主扈太公の娘である。後に梁山泊に入った。

【出典】

杜興道，［中略］西邊那箇扈家莊，莊主扈太公，有箇兒子喚做飛天虎扈成，也十分了得。惟有一箇女兒最英雄，名喚一丈青扈三娘。使兩口日月雙刀，馬上越法了得。（百二十回本『水滸傳』第四十七回）

【作例】

「一丈青扈三娘」（明・陳洪綬繪『水滸葉子』、明末刊本）

「一丈青単捉王矮虎」（一百回本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』第四十八回、萬暦三八年［1610］容與堂刊本）

「王英・扈三娘」（『水滸全圖』不分巻、清刊本）

「一丈青扈三娘」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

「一丈青扈三娘」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年［1848］不朽堂刻本）

いちだんわき　一團和氣

「一団和気」は宋の二程の一人である程顥（明道）の様子を形容する言葉である。明代の皇帝朱見深が皇室の団結を呼びかけるために、「一団和気」の絵を描かせたという。それは後に中国年画の画題となり、とりわけ蘇州桃花塢年畫「一団和気」の濫觴となった。

【出典】

明道終日坐，如泥塑人，然接人渾是一團和氣，所謂望之儼然，卽之也温。（清・黄宗羲撰『宋元學案』巻十四）

【作例】
「一團和氣」（『蘇州桃花塢木版年畫』江蘇古籍出版社・香港嘉賓出版社1991年）
「一團和氣」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年［1809］序刊本、南嶺館蔵本）

いちねんさんしゅう　一年三秀

「一年三秀」は霊芝の絵である。「九茎呈瑞美、三秀擅英奇」に由来する。

【作例】
「芝九茎」（明・程大約撰『程氏墨苑』巻八、萬暦二二年～三七年［1594～1609］刊本）

いちねんはじめていちねんのはるあり　一年始有一年春

唐の崔敏童（さいびんどう）の「宴城東荘」（城東（じょうとう）の荘（そう）に宴（えん）す）という七言絶句を図解する絵である。

【出典】
一年始有一年春，百歲曾無百歲人。能向花前幾回醉，十千沽酒莫辭貧。（崔敏童「宴城東荘」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】
「一年始有一年春」（紅翠齋主人畫『畫本唐詩選』四編・七言絶句續編、寛政五年［1793］嵩山房刊本）

いちもくこく　一目國

一目国は伝説の国である。『山海経』によると、その国が鍾山（一説は北海の外）にある。そこの人は一つの目しかないが、顔の真ん中にある、手足は皆揃っているという

【出典】
一目國在其［鍾山］東，一目中其面而居。一曰，有手足。（晉・郭璞注『山海經』海外北經）
一目國在北海外，其人一目，當其面而手足皆具也。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十三卷）

【作例】
「一目國」（馬昌儀撰『古本山海經圖説』巻八・海外北經、山東畫報出版社、2001年）
「一目國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「一目國」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正徳三年［1713］序、杏林堂蔵板）
「一目國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

いちろ　一路

一羽の鷺の図である。鷺の中国語の発音は「lù」で、路と同じ発音である。「一鷺」は「一路」の語呂合わせである。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

いちろえいか　一路榮華

一羽の鷺に芙蓉の図である。人生がいつも栄華富貴の生活を送ることになぞらえる。鷺の中国語の発音は「路」と同じである。また、蓉の中国語の発音は「róng」で、「栄」と同じ発音である。花は「huā」の発音で、華「huá」と声調が異なるものの、基本的には同じ発音ある。すなわち一羽の鷺は「一路」、芙蓉の花は「栄華」の語呂合わせである。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

いちろこうみょう　一路功名圖

一羽の鷺が大空を飛びながら、高鳴る姿が描かれている。鷺の中国語の発音は「路」と同じ発音である。故に「人生の旅では一路昇進、順風満帆」の意味である。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【作例】

「一路功名圖」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年［1809］序、南嶺館蔵本）

いちろへいあん　一路平安

一羽の鷺に竹の図である。人生が平安で、無事に送ることになぞらえる。鷺の中国語の発音は「lù」であり、路と同じ発音である。竹は平安の意味がある。（金井紫雲編『東洋畫題綜覧』参照）

【出典】

童子寺竹。衛公言、北都惟童子寺有竹一窠、纔長數尺。相傳其寺綱維、毎日報竹平安。（唐・段成式撰『酉陽雜俎』續集巻十）

いっかくせんにん　一角仙人

一角仙人はまた独角仙人ともいう。鹿が波羅奈国の仙人の精液を飲み、妊娠して一角仙人を生んだ。頭に一角があるため、一角仙人と呼ばれる。一角仙人が生まれた後、波羅奈国の仙人は彼を引き取り、育てた。一角仙人は一生懸命に勉強し、十八種の経典に精通した。ある時、山登りをした際、大雨が降った。足が鹿に似ているため、滑りやすく怪我をした。そこで腹が立って十二年間雨が降らないように呪った。結局干ばつを招き、人民の生活が苦しくなった。波羅奈国王が憂愁懊悩に陥り、解決できない人を募集したところ、扇陀という淫女が応募し、歓喜丸と美酒を持って一角仙人のところに行った。扇陀は一角仙人に歓喜丸と美酒を飲ませ、柔らかい皮膚に触らせ、淫乱の気持ちを起こさせて、一角仙人の神通力を失くした。すると、雨が七日間降り続いた。後に一角仙人は反省し、山に戻り、修行を続けて前の神通力を取り戻したのである。

【出典】

時波羅奈國山中有仙人。以仲秋之月，於澡槃中小便。見鹿合會婬心卽發，精流槃中，鹿飲之，卽時有身，滿月生子大類如人，頭有一角，其足似鹿。鹿當產時，往仙人舍前生子，付仙人而去。仙人出時，見此鹿子，自念本緣知是己兒，取已養育。及其年大，勤教學習，通十八種大經。又學坐禪，行四無量心得五神通。一時上山，值大雨泥滑。其腳不便躄傷其足，便大瞋恚，咒令不雨。仙人福德諸龍鬼神皆爲不雨，不雨故穀果不生，人民窮乏無復生路。波羅奈王憂愁懊惱，命諸大官集議雨事。明者議言，我聞有一角仙人，上山傷足，瞋咒令十二年不雨。王卽開募，若有能令仙人失五通屬我爲民者，當與分國半治。是波羅奈國有婬女，名曰扇陀。端正巨富，來應王募。婬女言，若是人者我能壞之作。是語已，取金槃盛好寶物，語王言。我當騎此仙人來。婬女卽時求五百乘車，五百美女，五百鹿車，載種種歡喜丸，皆以衆藥草和之。及持種種大力美酒，色味如水。服樹皮衣行林樹間。以像仙人。於仙人舍邊作草庵住。一角仙人遊行見之，諸女皆出好華妙香供養仙人，仙人歡喜。諸女以美言敬辭問訊仙人，將入房中坐好床褥，與好淨酒以爲淨水，與歡喜丸以爲果瓜。食飲飽已，語諸女言，我從生來初未得如此果水。諸女言，我一心行善。故天與我願得此果水。仙人問女，汝那膚色肥盛。答曰，我常食此好果，飲此美水。仙言，汝何不在此住。答曰，亦可住耳。女呼共澡洗。女手柔軟觸之，心動遂成婬欲。卽失神通。天爲大雨七日七夜。令得歡樂飲食七日，酒食皆盡。繼以水木果，其味不美。更索前者，答言已盡，今當共取，去此不遠，有可得處。仙人言，隨意。共出去城不遠，女便臥地言，

我極不復能行。仙人言，汝不能行者，騎我項上，我當擔汝。女先遣信報王，王可暫出觀我智能。王見問言，何由得爾。女曰，以方便力無所復能。令住城中好供養恭敬之。足其所欲拜爲大臣。住城少日，身轉羸瘦。念禪定心厭此世欲。王問仙人，汝何不樂。答曰，雖得五欲，常念林間。王曰，本除旱患，何爲強奪其志。卽便遣之。既還山中精進，不久還得五通。一角仙人，我身是也。婬女者，耶輸陀羅是也。（「經律異相」巻三十九，『大正新脩大藏經』第五十三巻・事彙部上）

【作例】

「一角仙人」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻三、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

「一角仙人」［探幽守信筆］（信天翁月岡法橋雪鼎『和漢名筆金玉畫府』巻四、明和八年［1771］寶文堂刊本）

いっかだるま　一華達磨

「一華達磨」は達磨が二祖慧可に残した偈語によるものである。ここでは「華」は「花」のことである。

【出典】

聽吾偈曰，吾本來茲土，傳法救迷情。一花開五葉，結果自然成。（宋・普濟撰『五燈會元』巻一）

【作例】

「一華達磨」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻六、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

いっかんなんのさいわいかときを同じゅうするをえたる　一官何幸得同時

唐の包何（ほうか）の「寄楊侍郎」（楊侍郎（ようじろう）に寄（よ）す）という七言絶句を図解する絵である。

【出典】

一官何幸得同時，十載無媒獨見遺，今日不論腰下組，請君看取鬢邊絲。（包何「寄楊侍郎」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「一官何幸得同時」（紅翠齋主人畫『畫本唐詩選』四編・七言絶句續編、寛政五年［1793］嵩山房刊本）

いっきにがん　一亀二雁

「一亀二雁」は仏教における寓言の一つである。二羽の雁が一匹の亀と親友である。亀が住んでいる池の水が枯れたため、二羽の雁は亀に木の枝を銜えさせて、二羽の雁が枝の両端を銜えて亀を水の多いところに運ぼうとした。枝を加える間にくれぐれも話をしないようにと亀に注意した。途中、子供たちがそれを見て「雁が亀を銜えて行った。雁が亀を銜えて行った」と言う。亀は腹が立ち、「あなたたちと関係ない」と言った途端に、空から地面に落ちて即死したという。

【出典】

如五分律云，佛告諸比丘，過去世時，阿練若池水邊有二鴈，與一龜共結親友。後時池水涸竭，二鴈作是議言，今此池水涸竭，親友必受大苦。議已，語龜言，此池水涸竭，汝無濟理。可啣一木，我等各啣一頭，將汝著大水處。啣木之時，愼不可語。卽便啣之，經過聚落。諸小兒見，皆言，鴈啣龜去，鴈啣龜去。龜卽瞋言，何預汝事。卽便失木，墮地而死。（唐・釋道世撰『法苑珠林』巻八十二，引證部第四）

【作例】

「一亀二雁」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻二、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

いっきょくのりょうしゅうきんせききよし　一曲涼州金石清

唐の張喬（ちょうきょう）の「宴辺将」（辺将（へんしょう）を宴（えん）す）という七言絶句を図解する絵である。

【出典】

一曲涼州金石清，邊風蕭蕭動江城。座中有老沙場客，横笛休吹塞上聲。（唐・張喬「宴邊將」，明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「一曲涼州金石清」（紅翠齋主人畫『畫本唐詩選』四編・七言絶句續編、寛政五年［1793］嵩山房刊本）

いっこうきゅうだい　一甲及第

一匹の蟹が蘆にくっ付いている図である（金井紫雲撰『東洋画題綜覧』）。甲は蟹のことである。故に「一甲」は一匹の蟹のことである。中国の科挙試験では進士に合格した前三名は一甲という。すなわち状元（第一名）、榜眼（第二名）、探花（第三名）ということである。

いっし　一指

↓「俱胝竪指」

いっしかさいけい　一枝花蔡慶

蔡慶は『水滸伝』の中の一人の豪傑で、綽名は「一枝花」という。鉄臂膊蔡福の弟である。後に二人がともに梁山泊に入った。

【出典】

這個小押獄蔡慶，生來愛戴一枝花，河北人氏，順口都叫他做一枝花蔡慶。（百二十回本『水滸傳』第六十二回）

【作例】

「花蔡慶」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）

「一枝花蔡慶」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

「一枝花蔡慶」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年［1848］不朽堂刻本）

いっしだるま　一指達磨

【作例】

「一指達磨」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻六、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

「一指達磨」（某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年［1689］刊本）

いっしののうえんつゆこうをこらす　一枝濃艶露凝香

唐の李白（りはく）の「清平調詞二」（せいへいちょうし）という七言絶句の中の一首を図解する絵である。清平調は楽府の題名の一つである。

【出典】

一枝濃艶露凝香、雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧。（李白「清平調詞二」、明・李攀龍編『唐詩選』巻七・七言絶句）

【作例】

「一枝濃艶露凝香」（芙蓉先生畫『畫本唐詩選』續編、寛政二年［1790］嵩山房刊本、文化一一年［1805］再板）

いっしょう　一笑

蘇東坡が描いた絵に、竹に一匹の犬があるという。竹冠に犬という文字は「笑」であるため、「一笑」に見立てる。

【作例】
「一笑圖」（明・宣宗帝朱瞻基作、アメリカ・ネルソン美術館所蔵）
「一笑圖」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年［1809］序、南嶺館蔵本）

いっしょうけいせき　逸少傾瀉

逸少は王羲之の字である。王羲之の妻である郗夫人が二人の弟愔と曇に「謝安石、万石兄弟が訪ねて来た際、王羲之が食器を全部出してもてなしたが、あなたたちが訪ねて来た際、特に何もしませんでした」と言った。すなわち王羲之は親友に一生懸命にご馳走でもてなすなのに、妻の弟たちに比較的に冷たいという意味で、王羲之の人に対する好き嫌いの激しい性格があらわにされたのである。

【出典】
晉書王羲之字逸少，司徒導從子，年十三，謁周顗，顗異之。時重牛心炙，座客未嚼，顗先割啗羲之，於是始知名。［中略］世說曰，郗夫人謂二弟司空，中郎曰，王家見二謝，傾筐倒寫，見汝來，平平耳。無煩復往。二弟謂愔與曇也。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】
「逸少傾瀉」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻九、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

いっしんけいしゅうとなる　一身爲輕舟

唐の常建の「西山」という五言古詩を図解する絵である。

【出典】
一身爲輕舟、落日西山際。常隨去帆影、遠接長天勢。物象歸餘清、林巒分夕麗。亭亭碧流暗、日入孤霞繼。洲渚遠陰映、湖雲尚明霽。林昏楚色來、岸遠荊門閉。至夜轉清迴、蕭蕭北風厲。沙邊雁鷺泊、宿處蒹葭蔽。圓月逗前浦、孤琴又搖曳。冷然夜遂深、白露沾人袂。（常建「西山」、明・李攀龍編『唐詩選』巻一）

【作例】
「一身爲輕舟」（高井蘭山著、翠渓先生畫『畫本唐詩選』五編、天保三年［1832］嵩山房刊本）

いっぴこく　一臂國

一臂國は伝説の国である。『山海経』によると、その国は三身国（一説は西海）の北にある。そこの人は片方の目、鼻の穴、手、足など体の半分しか持っていない。魚や鳥と似っているという。

【出典】
一臂國在其［三身國］北，一臂，一目，一鼻孔。有黃馬，虎文，一目而一手。（晉・郭璞注『山海經』海外西經）
一臂國在西海之北，其人一目，一孔，一手，一足，半體比肩，猶魚鳥相合。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】
「一臂國」（馬昌儀撰『古本山海經圖説』巻七・海外西經、山東畫報出版社、2001年）
「一臂國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「一臂國」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正德三年［1713］序、杏林堂蔵板）
「一臂國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

いっぴんだいふ　一品大夫

鶴と松の絵である。鶴は一品文官の補服（階級を示す模様の生地が

縫い付いている官服）にある模様であり、松は大夫の意味である。秦の始皇帝が泰山の松を大夫に封じることに由来する。

【出典】

二十八年，始皇東行郡縣，上鄒嶧山。立石，與魯諸儒生議，刻石頌秦德，議封禪望祭山川之事。乃遂上泰山，立石，封，祠祀。下，風雨暴至，休於樹下，因封其樹爲五大夫。（漢・司馬遷撰『史記』巻六，秦始皇本紀第六）

【作例】

「一品　仙鶴褙」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』衣服二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

いっぴんとうちょうのず　一品當朝圖

明・清両朝の一品文官の場合、補服の前後に鶴の刺繍がある。一品の文官は皇帝の重臣であり、朝廷の日常政務を処理する立場にある。

【出典】

文一品朝冠，頂鏤花金座，中飾東珠一，上銜紅寶石。補服前後繡鶴，惟都御史繡獬豸。朝帶鏤金銜玉方版四，每具飾紅寶石一。餘皆如公。（『清史稿』巻一百三，志七十八，輿服二）

【作例】

「一品當朝」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海点石齋書局石印本）

「一品當朝圖」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年［1809］序、南嶺館蔵本）

いばしんえんのず　意馬心猿圖

「意馬心猿」はまた「心猿意馬」ともいう。集中力がないという意味である。

【出典】

佛教典故。大日經・住心品分析六十種心相，其中之一爲猿猴心，謂躁動散亂之心如猿猴攀緣不定，不能專注一境。意則猶如奔馬，追逐外物，故稱意馬。佛家把心猿意馬視爲入定修道之障礙。玄奘上唐太宗表謂願托慮於禪門，澄想於定心。制情猿之逸躁，繫意馬之奔馳。維摩詰經變文卓定深沉莫測量，心猿意馬罷癲狂。心神散亂，把握不定，俗謂之心猿意馬。（案ずるに，『大日經・住心品』の六十種心相には「猿猴心」が見られない）（『佛教大辭典』，江蘇古籍出版社，2002年）

其或忘餐待問，立雪求知，困風霜於十七年間，涉南北於數千里外。始見心猿罷跳，意馬休馳。（宋・守堅撰『雲門匡眞禪師廣錄』巻下・遺表，『大正新脩大藏經』第四十七巻，諸宗部四）

【作例】

「意馬心猿圖」（橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻二、貞享四年［1687］平埜屋・貫器堂等梓行、文政一年［1818］再刊本）

いれてたにおおくしゅんきょう　入谷多春興

唐の郎士元（ろうしげん）の「山中即事」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

入谷多春興，乗舟棹碧潯。山雲昨夜雨，溪水曉來深。（郎士元「山中即事」，清・彭定求等編『全唐詩』巻二百四十八，中華書局，1960年，二七八七頁）

【作例】

「入谷多春興」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］有斐堂・玉樹堂原刻、寛政六年［1794］再刻本）

いんうんざんじつをおぶ　陰雲帯残日

唐の李頎の「奉送五叔入京兼寄綦毋三」（五叔の京に入るを送り奉り、兼ねて綦毋三に寄す）という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

陰雲帯殘日，悵別此何時。欲望黄山道，無由見所思。（李頎「奉送五叔入京兼寄綦毋三」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「陰雲帯残日」（石峯先生畫『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］嵩山房刊本、文化二年［1805］再刊本）

いんき　尹喜

尹喜、字は公度、号は関尹子といい、天水の人である。尹喜は目に日精があり、腕が膝に及ぶ長さで、堂々とした天人の顔をしている。周康王の頃、尹喜は空を観察し、聖人が西へ行くことを知った。その聖人に会うために、彼は函谷関の関令として赴任に行った。そこで、老子が通過した際、尹喜に慰留され、しばらく滞在した。老子は尹喜の要求に応じ、『老子』を書き残し、ついに函谷関を出て西へ行った。尹喜には『西昇経』などの著書があるという。

【出典】

尹喜，字公文，天水人。初，母氏嘗晝寢，夢天下絳霄。流紈其身。及喜生時，家陸地自生蓮花遍滿。及長，眼有日精，姿形長雅，垂臂下膝，堂堂有天人之貌。少好學墳索，善内學星宿。服精華，隱德行仁。大度不修俗禮。損身濟物，不求聞達。周康王時，爲大夫。仰觀乾象，見東方有紫氣西邁，知有聖人當度關而西。乃求爲函谷關令。預敕關吏孫景曰，若有形容殊俗，車服異常者，勿聽過。喜嘗候物色而迹之。時昭王二十三年七月十二日甲子，老君果乘白輿，駕青牛，徐甲爲御，欲度關。關吏入白喜。喜曰，今我得見聖人矣。卽具朝服出迎。跪伏叩頭，邀之曰，願暫留神駕。老君謝曰，吾貧賤老翁，居在關東，田在關西，今暫往取薪，何故見留。幸聽度。喜復稽首曰，大聖豈是取薪。久知大聖當來西遊，暴露有日。願少憩神駕。老君曰，聞開導竺乾，有古先生，善入無爲，永存綿綿，是以身就道，經歷關。子何過留耶。喜又曰，今觀大聖神姿超絶，乃天上之至尊。邊夷何足往觀。願不托言，少垂哀愍。老君曰，子何所見而知。喜曰，去冬十月，天理星西行過昴，自今月朔融風三至，東方眞氣狀如龍蛇而西度。此大聖人之徵，故知必有聖人度關。老君乃怡然笑曰，善哉。子之知吾，吾亦已知子矣。子有通神之見，當得度世也。喜再拜曰，敢問大聖姓字，可得聞乎。老君曰，吾姓字渺渺，從劫至劫，非可盡說。吾今姓李，字伯陽，號曰老聃。喜於是就官舍，設座供養，行弟子禮。老君乃爲喜留關下百餘日。盡傳以内外修煉之法。［中略］一日，老君謂喜曰，吾重告爾，古先生者，卽吾之身。嘗化乎竺乾，今將返神，還乎無名。吾今逝矣。喜叩首請侍行。老君曰，吾遊乎天地之表，嬉乎玄冥之間。四維八極，上下無邊。子欲隨吾，烏可得焉。喜曰，入火赴淵，下地上天，灰身沒命，願隨大仙。老君曰，汝雖骨相合道，法當成眞，然受道日淺，未能通神。安得變化，隨吾聖身。汝尚精修此道，體入自然，斯可與汝行化諸國爾。於是復以道德五千言授之。期曰，千日之外，可尋吾於蜀青羊之肆也。言訖，聳身空中，坐雲華之上，面放五明，身見金光，洞然十方。冉冉昇空，光燭館舍，五色玄黄。良久，乃沒。喜目斷雲霄，涕泣攀戀。其日江河汎漲，山川震動，有五色光貫太微，徧及四方。喜遂以老君所說理國修身之要，去奢滅欲之言，敘而編之，爲三十六章，名之曰西昇經。喜乃屏絶人事，三年之内，修煉俱畢。凡所授書，悉臻其妙。乃自著書九篇，號關尹子。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻一）

【作例】
「尹喜」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻一、萬暦二八年［1600］玩虎軒刊本）
「尹喜」（明・洪應明撰『仙佛奇踪』巻一、萬暦三〇年［1602］太和館刊本）
「尹喜」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「尹喜」（清・任熊繪『列仙酒牌』、咸豊四年［1854］蔡照初刻本）
「尹喜」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』一、天明四年［1784］寂照寺蔵板）

いんき　尹軌

尹軌は字が公度といい、太原の人である。尹喜は彼の祖先（一説は従弟）である。若い頃、天文を学び、讖緯（予言についてのこと）に精通する。後に南陽の太和山で仙人になり昇天し、「太和眞人」という称号を賜られた。

【出典】
尹軌者，字公度，太原人也。博學五經，尤明天文理氣，河洛讖緯，無不精微。晚乃奉道，常服黃精，日三合，年數百歲，而顏色美少。常聞其遠祖尹喜，以周康王，昭王之時居草樓，遇老君與說經。其後周穆王再修樓觀，以待有道之士。公度遂居樓觀焉。［中略］公度後到南陽 太和山，昇仙去矣。（晉・葛洪撰『神仙傳』巻九）
尹軌，字公度，太原人。文始先生尹喜之從弟也。少學天文，兼通讖緯。父事先生，因教服黃精花，及授諸道經，凡百餘篇，皆蒙口訣。先生登眞之後，卽與隱士杜沖同修煉之。賜爲太和眞人。仍下統仙僚於杜陽宮。軌時帶神丹，周歷天下，濟度有緣。或煉金銀，以賑貧苦。求哀之人，咸得其福利焉。晉惠帝 永興二年，從東來降于尹眞人之觀，語道士梁諶，以得道之素。及上帝命所司之事。語畢，忽聳身騰空，冉冉而登天府。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻一）

【作例】
「尹軌」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』一、天明四年［1784］寂照寺蔵板）

いんげんぜんじ　隠元禅師

隠元禅師（1592～1673）は福建省福清の人であり、俗姓は林といい、号は隠元という。順治十一年（1654）、日本長崎興福寺の僧、逸然性融らの要請を受け、弟子三十人余りを連れて、日本に渡った。最初は長崎の興福寺に住んだが、万治元年（1658）九月、江戸の湯島の麟祥院に寄寓し、将軍家綱に謁見した。寛文（1661）五月、京都の宇治で黄檗山万福寺を創建し、日本の黄檗宗の祖となった。元文十四年（1674）四月三日に寂した。（大修館書店『禅学大辞典』「隆琦」参照）

【作例】
「黄檗隠元禅師」［長崎長兵衛筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』六巻、寛延二年［1749］序刊本）

いんこうだっきをきる　殷郊斬妲妃

周の武王が諸侯の軍隊を率い、紂を討伐する。牧野というところで決戦し、紂を大敗した。紂王が鹿台に逃げ込み自殺した。妲妃も自殺した。そこで、武王が黄鉞（まさかり）を持って紂王の頭を斬り、大きい白旗に懸けた。玄鉞（まさかり）を持って妲妃の頭を斬り、小さい白旗に懸けた。

【出典】
周武王於是遂率諸侯伐紂。紂亦發兵距之牧野。甲子曰，紂兵敗。紂走入登鹿臺，衣其寶玉，赴火而死。周武王遂斬紂頭，縣之白旗，殺

妲己，釋箕子之囚，封比干之墓，表商容之閭，封紂子武庚祿父，已續殷祀。（漢・司馬遷撰『史記』巻三，殷本紀第三）

遂入至紂死所，武王自射之，三發而後下車，以輕劒擊之，以黃鉞斬紂頭，縣大白之旗。已而至紂之嬖妾二女。二女皆經自殺。武王又射三發，擊以劒，斬以玄鉞，縣其頭小白之旗。（漢・司馬遷撰『史記』巻四，周本紀第四）

【作例】

「殷郊斬妲妃」（法橋玉山畫『畫本玉藻譚』巻二、文化二年［1805］跋、羣玉堂・河内屋梓）

いんざん　隠山

隠山は杭州から西へ数里のところで、當夾山の南にある。唐の李渤が石の階段を作り、あたかも天然のようで、故に「隠山」という。一説は西湖の中の浮山である。湖水のあるところはすでに造成地となったため、山が陸地のところになった。隠山には六つの洞窟が有名である。

【出典】

出城西里許，當夾山之南，唐李渤闢通石林磴道，若天造然。因號隱山。又云西湖中之浮山也。湖今斥爲桑田。山峙於陸山，北高南下，峰不露奇，惟中藏六洞爲佳。從東入朝陽洞，有佛宇。山轉處溢一清池，躡級上之，其半稍平。石刻老子像。又從左穿洞心，懸汲而出井口。其洞爲北牖，團標四楹，正扼風嗌。又轉爲白雀洞，穿石峽而下，爲夕陽洞，爲嘉蓮洞。旋而南，爲南華洞。自北牖至南華，大小隨口石。穹窿處列十席，小則具趺跏。水漫流，可厲弗可舟也。（明・楊爾曾撰『海内奇觀』巻十）

【作例】

「隠山」（明・楊爾曾撰『海内奇観』巻十、萬暦三七年［1609］夷白堂刻本）

「隠山」（副孟義編『宋紫石畫譜』巻下、明和二年［1765］刊本）

いんしかんりん　隠之感隣

晋の呉隠之（?～413）は、字は處默といい、濮陽の鄄城（山東省鄄城）の人である。彼は十代の頃父親を亡くした。そのため、毎日号泣していた。近隣の韓康伯の母親が隠之の泣声を聞く度に、悲しくて食事もできない。彼女は康伯に「あなたが出世したら、ぜひこのような人を推挙してください」と言った。後に康伯は吏部尚書（官吏の考察や選抜を掌る大臣）になり、隠之を推挙した。隠之は晋陵太守、左将軍、広州刺史などを歴任した後、引退した。義熙九年（413）に、隠之が亡くなった。帝が彼に左光禄大夫、加散騎常侍といった官職を追贈した。

【出典】

晉書，吳隱之字處默，濮陽鄄城人。博涉文史，以儒雅標名。弱冠而介立有清操。年十餘丁父憂。每號泣，行人爲之流涕。事母孝謹。及其執喪，哀毀過禮。與太常韓康伯隣居。康伯母賢明婦人。每聞其哭，輟餐投筯，爲之悲泣。謂康伯曰，汝若居銓衡，當舉如此輩人。及康伯爲吏部尚書，隱之遂階清級。廣州珍異所出，前後刺史多黷貨。朝廷欲革其弊，以隱之爲刺史。州有水，曰貪泉。飲者懷無厭之欲。隱之至泉所，酌而飲之，因賦詩曰，古人云此水，一歃懷千金，試使夷齊飲，終當不易心。及在州，清操愈厲。後致仕，授光祿大夫金章紫綬。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「隠之感隣」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻二、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

いんしぎゅうとう　殷師牛鬬

晋の殷仲堪（?～399）の父親である殷師が耳の病気を患い、床下の蟻軍団の移動を聞き、牛の闘いと聞こえると言ったという。

【出典】

晉 殷仲堪，陳郡人。父師 晉陵太守。初，師病積年，仲堪衣不解帶，躬學醫術，窮其精妙，執藥揮淚，遂眇一目。居喪哀毀，以孝聞。孝武帝召爲中庶子，甚相親愛。其父嘗患耳聰，聞床下蟻動，謂之牛鬬。帝素聞之而不知其人，至是，問仲堪曰，患此者爲誰。仲堪流涕而起曰，臣進退惟谷。帝有愧焉。仲堪能清言，每云三日不讀道德論，便覺舌本間强。其談理與康伯齊名。後假節鎮江陵爲桓玄追兵逼殺。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「殷師牛鬬」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻七、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

いんしちしち　殷七七

殷七七の名前は文祥といい、また道荃という。生まれるところも年齢も不詳である。涇州で薬を売った時、霊臺の番人が皆疫病にかかり、七七の薬を服用してすぐ治った。人々は皆彼を神医とみなしている。七七は金が入るとすぐ困っている人に与えた。唐の周寶が浙西の地方長官になった頃、七七はまた出てきて薬を売り始めた。寶はそれを聞き、七七を招いた。寶は七七に言う。みな鶴林のツツジ花は天下の絶景とよく言われるが、九日に咲かせることができるだろうかと聞いた。七七は「できる」と答えた。その日にはたしてツツジ花が咲き乱れ、まるで春のようである。寶が連日花見をした。だが花が突然消えてしまった。ちょうど主人が客と応酬したところで、陪席の倡優は七七を辱めた。そこで七七は主人に二栗を酒令としようと頼んだ。皆はきっと秘技があると思い、喜んだ。そこで栗を回して、それを受取る人は香を嗅いだ。倡優だけは受け取った途端に、栗が石に化して鼻にくっ付いてしまった。それに臭くてたまらない。さらに起きて踊りだした。飾り物の花鈿が落ち、相次いで悲鳴を上げた。楽器が自ら演奏し、皆が抱腹絶倒した。しばらくして倡優が七七に謝ってやっと事態が収まった。石が自ら鼻から落ちて栗に戻り、花鈿がまた元のところに戻った。七七にはこのような術が数えきれないほど多かった。

【出典】

殷七七，名文祥，又名道荃。常自稱七七，俗多呼之，不知何所人也。遊行天下，人久見之，不測其年壽，面光白若四十許人。到處或易其姓名，不定。曾於涇州賣藥時，靈臺蕃漢疫病俱甚，得藥者入口卽愈，皆謂之神聖。得錢卻施於人，而嘗醉於城市間。周寶舊於長安識之，尋爲涇原節度，延之禮重，慕其道術還元之事。及寶移鎮浙西，後數年，七七忽到，復賣藥。寶聞之驚喜，召之師，敬益甚。每自醉歌曰，琴彈碧玉調，藥鍊白玉砂，解醞逡巡酒，能開頃刻花。寶常試之，悉有驗。復求種瓜釣魚，若葛仙公也。鶴林寺杜鵑高丈餘，每春末，花爛漫。寺僧相傳言，貞元年中有外國僧，自天臺鉢盂中，以藥養其根。來種之，自後搆飾花院鎖閉。人或窺見女子紅裳豔麗，遊於樹下，有輒採花折枝者，必爲所祟，俗傳女子花神也。［中略］寶一日謂七七曰，鶴林之花，天下奇花。常聞能開頃刻花，此花可開否。七七曰，可也。寶曰，今重九將近，能副此日乎。七七乃前二日往鶴林宿焉。中夜，女子來謂七七曰，道者欲開此花耶。七七乃問女子，何人深夜到此。女子曰，妾爲上玄所命，下司此花。然此花在人間已逾百年，非久卽開闌苑，去今與道者共開之，非道者無以感妾。於是女子瞥然不見。來日晨起，寺僧忽訝花漸開蘂。及九日，爛漫如春。乃以聞寶。一城士庶驚異之，遊賞復如春夏間。數日，花俄不見，亦無花落在地。七

五七

七偶到官僚家，適值賓會次。主與賓趨而迎奉之。有佐酒倡優共輕侮之，七七乃白主人，欲以二栗爲令，可乎。咸喜，謂必有戲術，資於歡笑。乃以栗巡行，接者皆聞異香驚歎，唯佐酒笑七七者二人，化作石綴在於鼻，掣拽不落，但言穢氣不可堪聞。二人共起狂舞，花鈿委地，相次悲啼，粉黛交下，及優伶輩一時亂舞，鼓樂皆自作聲，頗合節奏，曲止而舞不已。一席之人，笑皆絕倒。久之，祈謝於七七。有頃，石自鼻落。復爲栗。傳之異香，及花鈿粉黛悉如舊，略無所損。咸敬事之。七七酌水爲酒，削木爲脯，使人退行，指船卽駐，呼鳥自墜，唾魚卻活，撮土畫地狀山川形勢，折茅聚蟻變城市人物，有曾經行處見之，言歷歷皆似，但小狹耳。凡諸術不可勝紀。（南唐・沈汾撰『續仙傳』巻下）

いんしょうこらいこがこうにまんどをそなえてしゅうへいをふせぐ　殷将胡雷黄河口備萬弩防周兵

【作例】

「殷将胡雷黄河口備萬弩防周兵」（法橋玉山畫『畫本玉藻譚』巻二、文化二年［1805］跋、羣玉堂・河内屋梓）

いんちゅうはっせん　飲中八仙

飲中八仙は、唐の詩人杜甫の詩『飲中八仙歌』により、よく知られる八人の酒豪のことである。かれらは賀知章、汝陽王、李適之、崔宗之、蘇晉、張旭、焦遂、李白である。

【出典】

知章賀知章，會稽人。自稱祕書外監。騎馬似乘船，眼花落井水底眠。汝陽讓皇帝長子璡，封汝陽王。三斗始朝天，道逢一作見。麴車口流涎，恨不移封向酒泉。左相李適之，天寶元年爲左丞相。日興費萬錢。飲如長鯨吸百川，銜杯樂聖稱世一作避賢。宗之崔宗之，日用之子，襲封齊國公。瀟灑美少年，舉觴白眼望青天。皎如玉樹臨風前。蘇晉晉珣之子，官至左庶子。長齋繡佛前。醉中往往愛逃禪。李白一斗詩百篇，長安市上酒家眠，天子呼來不上船，自稱臣是酒中仙。張旭旭善草書。三杯草聖傳，脫帽露頂王公前，揮毫落紙如雲煙。焦遂甘澤謠，布衣焦遂爲陶峴客。五斗方卓然，高談雄辯驚四筵。（杜甫「飲中八仙歌」，清・彭定求等編『全唐詩』巻二百十六，中華書局，1960年）

【作例】

「飲中八仙」（明・程大約撰『程氏墨苑』巻六、萬暦年間［1573～1620］刊本）

「飲中八仙」［八図、詩あり］（『呉友如畫寶』第一集上・古今人物圖、中国古畫譜集成第二十一巻、山東美術出版社，2000年）

「飲中八仙」［四図］（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

「飲中八仙」［八図、如川周信筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』五巻、寛延二年［1749］序、寶文堂刻本）

いんちゅうぶん　殷仲文

殷仲文（?～407）は陳郡（河南省淮陽）の人である。文章が得意であり、世によく知られていた。桓玄との姻戚関係のため、新安太守に左遷されたが、後に桓玄とともに反乱を起こし、侍中、左衛将軍となった。玄が失敗した後、鎮軍長史、尚書、東陽太守を歴任したが、義熙三年、反逆罪で劉裕に殺された。

【出典】

殷仲文，南蠻校尉覬之弟也。少有才藻，美容貌。從兄仲堪薦之於會稽王道子，卽引爲驃騎參軍，甚相賞待。俄轉諮議參軍，後爲元顯征虜長史。會桓玄與朝廷有隙，玄之姊，仲文之妻，疑而間之，左遷新安太守。仲文於玄雖爲姻親，而素不交密，及聞玄平京師，便棄郡

投焉。玄甚悅之，以爲諮議叅軍。時王謐見禮而不親，卞範之被親而少禮，而寵遇隆重，兼於王，卞矣。玄將爲亂，使總領詔命，以爲侍中，領左衛軍。玄九錫，仲文之辭也。［中略］仲文素有名望，自謂必當朝政，又謝混之徒疇昔所輕者，並皆比肩，常怏怏不得志。忽遷爲東陽太守，意彌不平。［中略］義熙三年，又以仲文與駱球等謀反，及其弟南蠻校尉叔文並伏誅。仲文時照鏡不見其面，數日而遇禍。

（唐・房玄齡等撰『晉書』巻九十九，列傳第六十九）

【作例】

↓「仲文」

いんとうさんめんのあみをとく　殷湯解三面網

湯王は出かける時に、野原に網を四面から囲むように張る者を見かけた。その人は空から降りるもの、地下から出てくるものは皆私の網に入ると言った。湯王は言った。「ああ、やりすぎた」と。そこで三面の網を取り外すよう命じた。その人に次のように言わせた。「左に行きたいならば、左に行きなさい。右に行きたいならば、右に行きなさい。わたしが命令しなくても、私の網にはいってくれるだろう」と。諸国はその話を聞き、皆湯王の仁徳は鳥獣まで及んでいると言い、湯王に従うようになった。後に湯王は諸国の軍隊を率いて、夏の桀を討伐し、殷の王朝を作った。

【出典】

湯出。見野張網四面，祝曰，自天下四方，皆入吾網。湯曰，嘻，盡之矣。乃去其三面，祝曰，欲左左，欲右右，不用命乃入吾網。諸侯聞之曰，湯德至矣，及禽獸。當是時，夏桀爲虐政淫荒，而諸侯昆吾氏爲亂。湯乃興師率諸侯，伊尹從湯，湯自把鉞以伐昆吾，遂伐桀。

（漢・司馬遷撰『史記』巻三，殷本紀第三）

【作例】

「祝網施仁」（『圖像合璧君臣故事句解』巻上、延寶二年［1674］上田甚兵衛板行、和刻本）

「湯王祝網」（『新刊全相平話武王伐紂書』巻上、至治年間［1321～1323］建安虞氏刊本）

いんとたん　印都丹

印都丹の人は体が黒色である。土地が厚くて、雲がない。応天府（江蘇省南京市）まで馬で一年二ヶ月かかるという。

【出典】

印都丹人身黑色，地熱無雲，至應天府馬行一年二箇月。（明・王圻，王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】

「印都丹」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「印都丹」（寺島良安撰『和漢三才圖會』巻十四、正徳三年［1713］序、杏林堂蔵板）

「印都丹」（橘有税撰『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］寶文堂刊本）

いんのさんじん　殷三仁

殷の三仁とは微子、箕子、比干という三人の忠臣のことを指している。

【出典】

微子去之，箕子爲之奴，比干諫而死。［論語］（宋・王應麟撰『小學紺珠』巻五）

殷三仁仁者天理之正，三人出處不同，而各安乎天下之正，故曰三仁。微子，

箕子，比干。（明・張九韶撰『羣書拾唾』巻五）

いんのだっき　殷妲妃

→「妲妃」

【作例】

「殷妲妃」（法橋玉山畫『畫本玉藻譚』巻一、文化二年［1805］跋、羣玉堂・河内屋梓）